

奈良県香芝市

しもだひがしいせき

下田東遺跡

五位堂駅前北第二土地区画整理事業の施行に伴う

平成17・18年度発掘調査の成果



香芝市都市整備部区画整理課

香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

はじめに

下田東遺跡は、近鉄五位堂車庫の北側の下田東3丁目から狐井に広がる、縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。西流する葛下川とその支流である熊谷川や山崎川、初田川が流れ込む標高51～53mの低地に立地しています。

この調査は、五位堂駅前北第二土地区画整理事業の施行に伴う事前調査として、平成13年度（第1次調査）から香芝市教育委員会が継続して行っており、平成18年度は6年目（第6次調査）でした。調査地は、平成17年度がH地区、I地区、J地区、K地区、L地区59トレンチ・60トレンチの合計4,764.5m²、平成18年度がK地区66トレンチ、L地区61・63トレンチ、M地区62・64・65トレンチ、N地区67トレンチの合計2,737m²です。

平成16年度までの調査成果としては、古墳「下田東古墳」1基（6世紀末の帆立貝式古墳）と縄文時代から平安時代の旧河道、古墳時代から平安時代にかけての建物群、室町時代の環濠居館などが見つかっています。



下田東古墳（第1次調査）



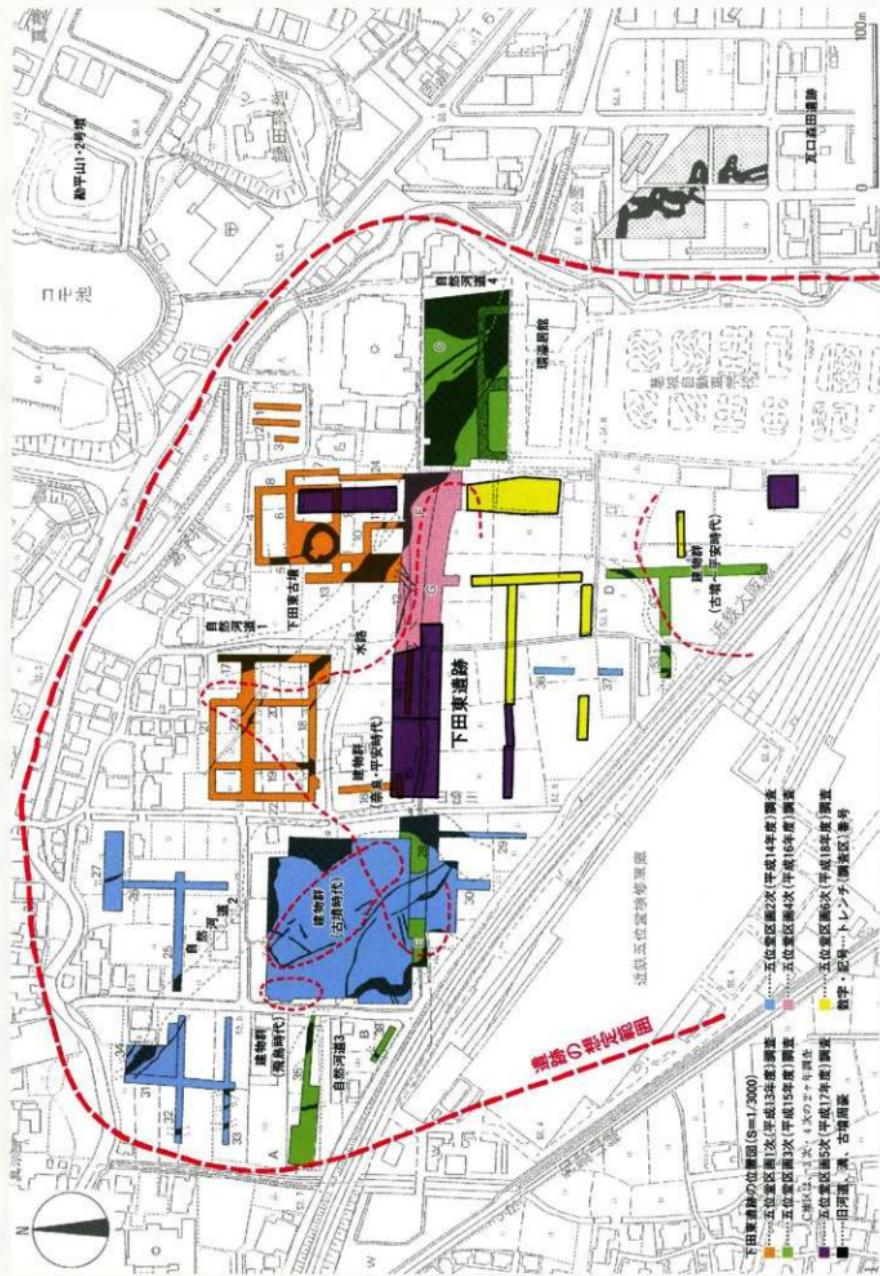
出土埴輪（第1次調査）



C地区環濠（第3次調査）



C地区河道内杭列及び木製舗（第4次調査）



平成17年度の調査

[H・I地区]

H地区とその東に位置するI地区では、耕作溝の下から柱穴を確認しました。柱穴の配置から、数棟の掘立柱建物が復元できます（写真❶・❷）。I地区では、柱穴がいくつも重なっていることから、数度の建て直しが考えられます。また、建物の方位は少なくとも4方向復元できることから、建物の方位によってその時期の異なる可能性が考えられます。

H地区とI地区では、古墳時代から近代までの井戸がたくさん見つかりました。中でも、H地区で見つかった平安時代初期の井戸A（写真❸）は平面が方形の隅柱横桿横板組の井戸枠（一辺約1.2m）をもち、検出面からの深さは約2mでした。井戸の中からは、平安時代初めごろの土師器や須恵器、黒色土器などとともに、文字が記された木簡が1点（写真❹）、斎串が11点（写真❺-3）見つかりました。斎串は短冊状の木製品を薄い板の先端を主頭状に削り下端を尖らせたもので、地面に刺すことによって清浄な空間をつくる結界の役割を果たすと考えられています。また、土師器の甕や須恵器の壺に穴をあけたり（写真❻-1）口縁を打ち欠いたり（写真❻-2）したものが出土していますが、このように土器をわざと使用できないようにすることで“マツリ”に使用されたと考えられます。これらのことから、井戸の廃棄に伴って井泉祭祀が行われたと考えられます。なお、木簡は香芝市内で初めて出土しました。

このほか、H地区では古墳時代の井戸B（写真❻）が見つかっています。丸太を割り貫いて井戸枠とする割り貫き井戸で、その直径は約45cm、残存する長さは約60cm、厚さは約4cmでした。中からは、粉々に割られ土師器や須恵器の細片のほか、白玉や木製の櫛が土とともに詰め込まれた状態で見つかりました。

I地区でも多くの井戸が見つかりました。平安時代初めごろの井戸C（写真❾・❿）は掘形が一辺約2.5m、井戸枠が一辺1.3m、深さが検出面より約3.5mで、市内で見つかった井戸のなかでも最大級です。井戸枠は横板に切り込みを入れて組み合わせた横板組みで作られており、5~7cmの分厚い木材を使用していました。井戸の中からはたくさんの土師器や須恵器などとともに斎串10点や人面墨書き土器片、底部に穴を開いた土師器の甕など、“マツリ”に使われたと考えられる遺物が見つかりました。

さらに、これらの下層からは、南北方向に屈曲して流れる旧河道を確認しました（写真❻・❽）。少量の縄文時代後期から弥生時代はじめの土器片が見つかっており、縄文時代の河道であると考えられます。



● H地区 河道（東から）



● I地区 河道（東から）



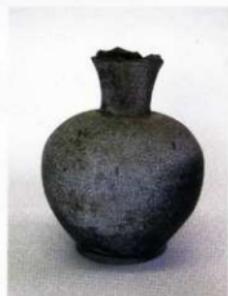
H地区全景（南から）



● H地区 井戸A（西から）



1



2



● H地区 井戸B（西から）



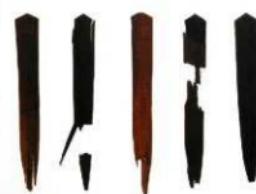
3



4

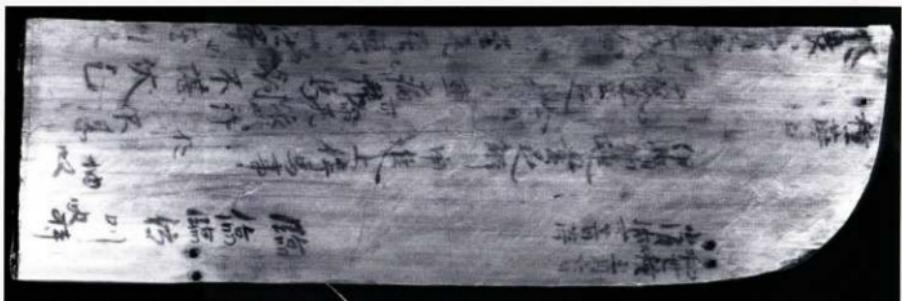


● H地区 捩立柱建物（東から）



- H地区 井戸A出土 土器
- 1. 空孔のある土器
- 2. 口縁を打ち欠いた土器
- 3. 竹串
- 4. 鈎形（付着しているのは木製のあみカゴ）

5



● H地区 井戸A出土 木筒 (長さ36.8cm、幅約11.1cm、厚さ0.5~1.0cm)

H地区の井戸Aで出土した木筒は、長さが約37cm、幅約11cm、厚さ約1cm前後の曲げ物の底板を利用したヒノキ科アスナロ属の板材で、両面に墨で文字が書かれていました。しかし、ところどころ文字が薄くなっていたり、削って再利用されていたりすることから、すべてを解読することはできません。

木筒は、横長に板をおいて文字を書いた面（a面）には、稲刈りの日程や魚の売却に関するなどが書かれていると考えられます。反対の面（b面）は板を縦長に置いて文字が書かれており、おそらく、種まきなど農作業の日程に関する記載の表面を削って、「伊福部連豊足」という人物の下書きとして利用されていました。下書きとは、律令に定められた公文書の様式のひとつで、下級の役人が上級の役人に対して上申する際に用いられました。その内容は、豊足が重病をわずらったため預かっている馬を飼うことができないというものでした。何度も同じ内容を書き並べるなど推敲している形跡があり、下書きであると考えられます。公文書の書式にのっとっていることから、公的組織に関係した人物の下書きであることが推測され、下田東遺跡の性格を考える上で貴重な史料です。



I地区 全景（真上から）



● I地区 全景（北東から）



● I地区 捶立柱建物（北から）



● I地区 井戸C（南から）



● I地区 井戸C（南東から）

[J地区]

素掘溝のほか柱穴や掘立柱建物1棟、古代の井戸2基、古墳時代の斜行溝、古代の河道が見つかりました。素掘溝は東西溝と南北溝を検出し、重複を繰り返していました。トレンチ南の南北溝からは、平安時代前期のほぼ欠損のない土師器の杯（写真●）が見つかったこと、そのすぐそばで見つかった土師器の杯の底部には墨書きで「西」と書かれていたことなどから、すべてが中近世の耕作溝と考えることには問題が残ります。また、素掘溝の下層からは、上層の素掘溝によって削平されていたものの、東に10~40度ほど傾く斜行溝●・●が数条残っていました。これらの溝は角度を変えて重複したものもあります。出土した土器から、古墳時代の溝であると考えられます。

平安時代の井戸（井戸D・E）は、上部は上記の素掘溝によってかなり削平されていると考えられますが、下部は井戸枠がよく残っており、井戸の構造がわかる貴重な資料となりました。井戸D（写真●）は、縦板組みの井戸枠で、底に曲げ物を利用し、砂利をしいて浄水の機能をもたせていました。井戸E（写真●）は横板棧組みの井戸で、一枚一枚が丁寧に加工された木材を使用していました。枠の隅部にはほぞ穴を開けてしっかりと組み合わされていました。



J地区 全景（真上から）



● J地区 井戸D（南から）



● J地区 井戸E（南東から）

調査区の北端と南端では河道が見つかりました。北端の河道は無遺物で、この地に人が住み始める以前には埋没して沼地となっていたと考えられます。沼地の底からは葦などの植物と思われる無数の株根が見つかり、また、その周辺からは人の足跡も見つかりました。遺物はほとんどありませんでしたが、出土したわずかな遺物から古墳時代と考えられます。

南端の河道も北端と同じく最下層は無遺物でした。この河道は、北端の河道と同じく古墳時代には沼地となっていたものが、飛鳥時代、奈良時代と徐々に流れを変えた河道によって深くえぐられ、平安時代の中頃にはもう一度埋まっていたと考えられます。古墳時代の沼地からは牛のひづめ跡（写真⑩）と周辺から人の足跡が見つかり、牛を飼育していたことが想定されます。古墳時代の沼地をえぐりながら流れていった古墳時代から平安時代の遺物を含む河道の底は起伏がはげしく、部分的に深さ2m以上に及び、最下層からもたくさんの土器や流木、馬の骨などがみつかりました（写真⑪）。ちょうど河道の屈曲部にあたることや土層の堆積状況から急な流れが想定でき、そこに流木や土器などがたまつたものと考えられます。さらに、その河道の屈曲部には、地面と垂直に打ち込まれた杭列と、並行に打ち込まれた杭列が見つかっており、護岸施設と考えられます（写真⑫）。この河道は、調査地の南東に位置する平成15・16年度調査のF・G・C地区の河道や、平成13年度試掘調査の5・13トレーニチに繋がることが分かっています。

これらのことから、調査地の北側と南側は葛下川の流路であったと考えられ、古代の人が河や沼の周辺で水を利用しながら生活していたことが伺える貴重な調査となりました。



● 溝より出土した土師器の皿



● 河道の中から出土したイブツ



● 南端河道及び杭列



● 沼底の牛のひづめ跡

[K地区]

上層の南北方向の素掘溝の下層からピットや古墳時代の井戸（写真●）、落ち込み（写真●）、平安時代以降の流路●などが見つかりました。調査区の南西に位置するピット3基●の大きさは約50cm、深さ約30cmで、1.3mの等間隔で並んでおり、建物跡の可能性があります。ピットの中からは平安時代中期の遺物が出土しました。

さらに下層からは、縄文時代の河道（写真●）が見つかりました。河道は調査区の北西に東西方向に延びており、大歳山式や多角形底の破片など前期の縄文土器片（写真●）が出土していることから、縄文時代の河道であると考えられます。

なお、調査面積が狭小であるのに対して、造構に伴わない埴輪片がまとまって出土しています。人物埴輪や器財形埴輪の破片も出土していることから、付近に新たな古墳の存在が考えられます。



K地区 全景



● K地区 井戸 F



● K地区 落ち込み



● K地区 河道



● K地区 河道出土縄文土器

[L地区59・60トレンチ]

59トレンチと60トレンチは、上層の旧耕作土層を除去した後、59トレンチの南西隅に見つかった明黄褐色粘質土の地山❶を除いた部分すべてが、河川堆積物でした。河川堆積の上にはうっすらと平安時代や古墳時代の面が残っており、平安時代の溝❷・❸や古墳時代の斜行溝、土坑を検出しました。斜行溝（写真❹）には、埋土中から古墳時代後期の土師器や須恵器の破片が見つかりました。また、土坑（写真❺）からは古墳時代の壺が完形に近い状態で見つかりました。

河川堆積は、59トレンチの南西隅以外すべてに広がっていますが、埋土上層では縄文土器片が出土しましたが、下層では無遺物層であったことから、上層が縄文時代の河道（写真❻・❼）であると考えられます。河道は前述したH・I地区の河道につながると考えられ、多くの縄文土器やサスカイト片が出土しました。



59トレンチ 全景



❷ 古墳時代の溝



❺ 土器が出土した土坑



60トレンチ 全景



❷ 59トレンチ 河道及び岸



❷ 60トレンチ 河道

平成18年度の調査

[L地区]

第61トレンチ：土層は大きく3層に分かれ、第Ⅰ層は近代～現代の耕作土、第Ⅱ層は中世～近世の耕作土、第Ⅲ層は黄褐色粘質土で、平安時代～中世の遺構を検出しました。

このうち、第Ⅱ層の耕作土層において無数の素掘溝を検出しました。そして、この溝を完掘して第Ⅱ層を取り除いたところ、第Ⅲ層で2つの沼状遺構と溝状遺構1条を検出しました。これらは出土遺物から平安時代のものと考えられます。なお、トレンチ東部では近代～現代にかけての搅乱を受けていました。

沼状遺構（写真●、写真○）：もっとも深いところで、検出した面から深さ約30cmで、遺構の状況から自然地形と考えられます。なお、埋土から判断すると水の流れではなく、常に浅くたまっている状態であったと想定されます。遺物は黒色土器の椀と土師器の皿がもっとも多く、瓦器の破片も出土しました。そのほか、奈良時代の瓦が数点、石獅1点、熱によってわれたとみられる自然石が数点出土しています。完形の遺物はまったくなく、黒色土器の椀については胴部（身）の破片が極端に少なく、高台のみが多量に捨てられている状況でした。また埋土中には炭が多く混入しており、熱を受けた石が出土していることをあわせて考える必要がありそうです。

溝状遺構（写真○）：これも自然地形（流路）で、遺構の位置関係等から沼状遺構と一連のものと考えられます。



61トレンチ 全景（南上空から） 1. 沼状遺構 2. 沼状遺構 3. 溝状遺構



● 沼状遺構（東から）



● 溝状遺構（南東から）

[第63トレンチ]

61トレンチとおなじく、第Ⅲ層の上に耕作土が堆積しており、その層で素掘溝を検出しました。なお、トレンチ東部では河川の氾濫によると思われる砂礫層が広がっていました。遺構は第Ⅲ層でピット数基、土坑2基、井戸1基（写真●～④）を検出しました。

井戸は検出面から底まで深さ約5mで、方形組立型の井戸枠を用い地表面近くでは枠の外周を漆喰で固めていました。このような型式の井戸枠は古代から中世に盛行しました。遺物は黒色土器や飛鳥時代（7世紀第Ⅱ四半期）の軒丸瓦片、そのほか櫛、齋串、瓢箪などが出土しています。黒色土器は10世紀末～11世紀初頭に編年されることから、この井戸は構築時期は不明ですが平安時代まで存続したと考えられます。井戸枠の作りはかなり立派で、事業地内に屋敷、あるいは既往の調査同様に今年度も飛鳥時代の瓦が出土していることから寺院があった可能性もあります。また、2つの土坑からは古墳時代末から飛鳥時代の土師器や須恵器が出土しています。このことから、古墳時代の遺構が中世の耕作によって破壊されたことがうかがえます。



[M地区]

第62トレンチ：第Ⅲ層で複数の建物跡を検出しました。また、トレンチ西端部の素掘溝が検出された面から川原寺式軒丸瓦片が出土しています。川原寺式の軒瓦はこれまでの調査でも出土しており、事業地内に瓦葺の建物が存在した可能性があります。

第64トレンチ：他のトレンチと同じく第Ⅱ層で素掘溝、第Ⅲ層で数基の柱穴を検出しました。しかし、建物として復原されるものはありませんでした。また、このトレンチと63トレンチでは北に位置する61、62トレンチに比べて素掘溝と柱穴の密度が低く、あまり土地利用されていなかったと考えられます。

第65トレンチ：基本層序はほかのトレンチと同じで、第Ⅲ層上に堆積した耕作土層面から多数の素掘溝を検出しました。この素掘溝は62トレンチとの交差部を境に北と南で方向が違うことから、大きな土地の境界があったか土地所有者が異なっていた可能性があります。また、トレンチの南にむかって次第に第Ⅲ層や耕作土に砂が多く含まれ、南端部では遺構面が灰白色の砂となっています。この砂は河川の氾濫によって運ばれたもので、砂と耕作土が交互に堆積していることから耕作と氾濫を繰り返していたことがうかがえ、当時の人々の土地や耕作に対する思いが感じられます。そのほか、遺構は第Ⅲ層で柱穴や土坑、ピットも多数検出しました。これらのピットの中で底から軒平瓦や自然石が検出された柱穴が数基ありました。これらは柱の沈下を防ぐ役割を果たしていたと考えられます。

[K地区]

第66トレンチ：トレンチ東部で検出した自然流路内で土坑1基を検出しました。その土坑からは古墳時代の上器が出土しました。基本層序は第Ⅲ層以下は砂と粘土が交互に堆積しており、河道の時期と土壤化を繰り返していたものと推定されます。この土坑と自然流路（写真●）は第Ⅲ層で検出ましたが、この面では土地利用の痕跡が認められなかったことから、この周辺は平安時代～中世ころに農地として開発されるまで手が加えられなかったようです。



66トレンチ 全景（南上空より）



● 自然流路内（北から）



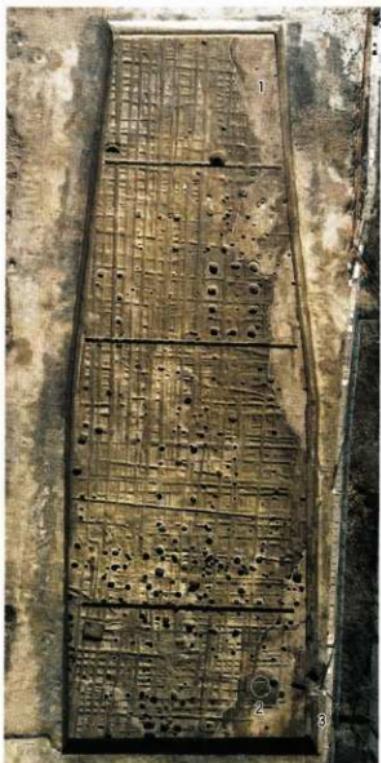
● 62、65トレンチ出土軒丸、軒平瓦

[N地区]

第67トレンチ：トレンチ東部で河川の旧流路を検出しました。遺構は第Ⅲ層で近世の井戸2基、平安時代の井戸2基、掘立柱建物7棟、ピットと土坑をあわせて300基ほど検出しました。

平安時代の井戸2基のうち1基（井戸2、写真①）は、直径約3mの掘り形で一辺約1mの方形組立型の木製井戸枠をもち、最上部では枠上に2段（残存部）の石積みを作っていました。つまり、地中に埋まる部分は木製枠とし、目に触れる地上部は石積みとして化粧していたと考えられます。井戸の埋土中からは、おもに黒色土器や土師器皿が出土しています。

また、もう1基（井戸3、写真②）の井戸は直径約1.3mの掘り形で、直径約40cmの曲物を井戸枠としていました。



トレンチ 全景（南上空から）
1. 河川旧流路
2. 井戸2
3. 井戸3



① 井戸2 出土状況（北西から）



② 井戸3 出土状況（西から）



● 発掘体験



● 平成17年度 I地区井戸C堀形出土 子持勾玉

まとめ

これまで下田東遺跡では飛鳥時代から奈良時代の瓦、鶴尾、壇、凝灰岩切石、石帶、円面鏡、石製有孔盤、勾玉、管玉、小玉、墨書き土器、土馬などがまとまって出土しています。

また、平成17年度調査では香芝市ではじめて木簡が出土しました。その記載方法から、その記載者である伊福部連豊足が公的機関に勤めた経験のある人物であることは間違ひありません。くわえて、香芝市内では狐井城山古墳に次いで2例目となる子持勾玉が出土しました（写真⑩）。奈良県内では当遺跡のほかには桜井市の芝遺跡でしか発見されていない表面に竹管文を施した例は全国的にも少なく、貴重な遺物と見なされます。

平成18年度調査では7世紀前半の軒丸瓦片が出土しました。これは、第1次調査で出土している鶴尾の年代と合致する可能性があります。これらの遺物が出土する遺跡として古代の官衙や寺院あるいは祭祀遺構が有力な候補としてあげられます。それらの存在を示す決定的な遺構を検出するには至っておりません。しかしながら香芝市内における古墳時代から平安時代前期にかけての土器の出土が当遺跡に集中していることが今までにわかっています。そのことに木簡および7世紀第Ⅱ四半期に遡る軒丸瓦という新たな史料がくわわり当遺跡が古代の香芝市における中心的な位置を占めていた可能性がさらに強まりました。また、当遺跡周辺は条里地割りが良好に残っている地域でもあり、検出した素掘溝はそれに合致しています。古代から中世にかけての土地利用、条里の施工時期を考えるうえでも重要な遺跡であるといえます。

（調査担当 平成17年度 福田由里子、藤田智子、巽義夫
平成18年度 辰巳陽一、巽義夫）

発行年月日	2007(平成19)年3月31日	事業機関・発行	香芝市都市整備部区画整理課
調査機関・編集	香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館	印刷	株式会社天理時報社